

ディベート授業の効果について

2年生の国語表現では、後期の授業で拮抗する二つの意見をとりあげて、自分の意見文を展開させる練習をしている。今年度はそれを、ディベート形式で試みることにした。ディベートは本来3年生の教材だが、タイミングをとらえて導入してみることにした。

なぜディベートか。一人一人に深めさせたいテーマがあり、それについて今の時点での自分の意見を確実に持たせるのに最適の手段と考えたからである。

一回目は「犯罪被害者的心と加害者的心は近づくことができるか」をテーマにした。主材料は河北新報新聞のコラム（H18.10.6付）。付随資料としてコラム中に出てくるさだまさしの『償い』の歌詞カードを配り実際の歌も視聴覚室で聴かせた。あわせて、河北新報（H19.10月）の犯罪被害者の会の記事を配った。

要約文づくりをした後、論題についての是非「近づくことができる・できない」どちらかを各自に決めさせた。結果はうまい具合にほぼ半々に分かれるクラスが多かった。かたく考えると固まってしまう生徒も多いので、次のように伝えた。

楽しくやってみよう。空回りしても、興奮してもいい。

ただ、チームはよく相談をすること。相手側の意見はよく聞くこと。判定員は両者の意見をよく聞き、根拠の示し方や説得力、聞き取りやすさなどを公平に判定すること。Aの数の合計を最後に司会が発表して勝敗を決める。

実際のディベートでは、意見の応酬に空回りが多かった。それでも、相手に伝わるように話すことの難しさについて、生徒自身が気づいたことは収穫だった。またこの一回目の論題では「とうてい許すことはできないが、近づくことはできるのではないか」というラインでの渡り合いが真剣になされた。それは主に「死ぬまでずっと相手を拒み、恨み憎みながら生きていたくない」という思いからくるものだつた。それはまた生徒たちの思考の深まりを示すものだつた。『償い』の中に、「神さま彼は許されたと思つていいのですね」というフレーズがある。生徒たちはまさにここにこだわった。被害者の妻は夫を事故で死なせた加害者を許したのではなく、加害者の努力で10年の間に心が近づいたのである。そのことに、生徒たちの議論を通して私が気づかされた。あの歌詞について、作者に聞いてみたい。

二回目の論題は「代理出産に賛成か反対か」を扱った。まずパソコンで予備知識をもたせ、次の時間に朝日新聞休日版アンケート記事（平成18年11月11日付）を配り、代理出産についての賛否世論調査にふれた。それから主材料の

見文を書かせた。賛否どちらかを決め、それに沿って理由の意見文を書かせた。結果はほぼ半々だったので、しめたと思つた。

実際のディベートでは、あるクラスは意見交換の過程で、発言者が1対1のことばの渡り合いになり、最後に発言の強い方が相手をねじ伏せるかたちで終わつたが、判定は圧倒的に相手側に票が入つた。そのこともちょっとした教室内のドラマだった。将来身近に起るかもしれない同姓の問題として、生徒たちが真剣に考えていることがうかがわれた。

争点の主なものは「人間として自分の血のつながりに対するこだわり」「出産後の子どもの心の問題は家族の愛情が解決すべき事」「自然の摂理に反していいないか」「子どもの人生もいらない人生も等しくかけがえのない人生だ」等だつた。

私はこの「ディベートのようなもの」を実施してよかつたと思っている。少なくとも、所期の第一目的である「話題に対するそれぞれの考えの深まりをもたせる」ことはできたようと思う。生徒たち自身の感想も概ね好評だった。「いろんな意見があるんだなと思った。やはり自分の考え以外を聞けるのは新鮮だつたし、納得するのも多かつたから、楽しかつた。言い合いできたこともおもしろいなと思った」という類の感想が多かつた。

犯罪という異常なできごとや代理出産を通して、生徒たちは自分をその立場において考えるという経験をしてくれたようと思う。いのちの重さが、それぞれに深められたことを願つてゐる。